

# 所感

## コロナ後

会長 鎌田英明



昨年のこの項でもコロナウイルス感染拡大をテーマに書かせていただいた。今年はコロナ後がどうなったのかを書くつもりでいたのだが、感染は1年以上経った現在も下火とならず、ウイルスの常である感染力を増した変異型が次々発生するに至り、正に海辺の波のように3波、4波と繰り返されている。ワクチン接種が思いの外進まぬなど、対応の拙さも相まって未だに終わりが見えない状況に入り込んでいる。この1年を振り返ってみると、結局は感染をくい止めて人類が生き残ることと、人々が衣食住足りて生活していくために欠かせない経済の活性化という、二律背反するテーマをどのように調整するかのせめぎ合いだったように思う。それにしても経済活動を止めるための補償金や、コロナ対応への支援金など、なんと多額の資金が注入されたことか、こんなにも財源に余力があるものなのかと驚くばかりだ。世間では会社の同僚や周囲の人達と密に接する機会を減らす目的で、オフィスには出ずに在宅でのリモートワークが推奨された。出社の義務がなくなるのならば家賃も物価も高い都市部を離れ、軽井沢のようなリゾート地に引っ越して悠々自適に仕事をするという、なんとも羨ましい転出組の話題がテレビで取り上げられたりもした。我々の仕事はリモートワークで済む職種では無いため、そのようなコペ転（コベルニクスの転回）は叶わないが、幸か不幸か生活はこれまでの日常とさして変わることはなかった。ただ、コロナ患者の受け入れとそれに伴う病院経営面への配慮など、病院管理職の端くれとして、これまでに経験の無い事態に悩み戸惑う日々を過ごして来たことも事実だ。

神皮の活動は、ご存じのとおり昨年の春に断腸の

思いで1年間の凍結を決断した。その時点では、1年もすればこれまでと同様の活動が再開できるだろうと安易に考えていた。だがそうは問屋が卸さず、これまでのような会合を開ける状態にはまだほど遠い。自身の先読みの甘さにも忸怩たる思いだ。一方で、ネット社会の恩恵ともいえるが、集まらずに済むWeb配信という新しいスタイルのお陰で、神皮も活動再開に漕ぎ着けることができた。この新しいスタイルは、ある意味神皮にとっての一条の光明かもしれない。

今般のコロナ騒ぎで片隅に追いやられてしまった感があるが、私が5期目となる会長職をあえて続けさせていただいたのは、差し迫った事情があったからに他ならない。それは50年以上受け継がれて来た伝統ある神皮例会が、これまでの形式では開催が難しくなり、共催メーカーとの関りも含めた抜本的な見直しが急務になったというものだ。そんな神皮の今後の運営方法を考えて行く上で、今回のWeb利用は一つのヒントになったのではないだろうか。あくまでも集まることが可能になったらという条件付きだが、例えば年3回の例会のうち1回だけを簡単な懇親の場も設ける集会型のものにして、あとの2回はリモートもしくはハイブリッド形式にするというのはどうだろう。感染対策と神皮の懐事情を考え合わせた上での私なりの提案である。

愚見を述べさせていただいた。私も在任期間が10年となり、いささか長くなり過ぎた。周りで支えてくださった優秀な先生方のお力でここまでこられたとと思っている。今後はその力をもってこのコロナ禍を福と転じて、コロナ後の神奈川県皮膚科医会を更に発展させていただきたいと願っている。

# 所感

## 金丸哲山



思いつくままに書かせてもらいます。神奈川県皮膚科医会と私の最初の出会いは今から44年前、北里大学病院皮膚科研修医の時でした。叔父が皮膚泌尿器科医で幹事をしていた事もあり、誘われて参加したのを記憶しています。大学で経験しためずらしい症例を例会で提示させていただいた事もありました。今と違って当番幹事の地元で開催される事が多く、神奈川県中、あっちこっち移動し、今迄行った事がない土地を訪れる事ができ、それもまた楽しかった事のひとつでした。懇親会も楽しみでした。研修医時代、腹をすかせていた時代、おいしいものを食べられて幸福でした。神奈川県皮膚科医会はまさに懇親の会でした。いつからか現在の様な形式になり、いつも横浜で開催される様になりました。こんな事を知っているのは年寄りだけです。

安西先生には良くしていただきました。日赤医療センターに大学から1年出向を命ぜられ一緒に働かせていただく機会を得ました。この時後に私の博士論文になる研究を大学の生化学教室でしていたため、昼は広尾、夜は相模原で睡眠時間が足りずよく外来のベッドで仮眠を取らせてもらってました。「おい、金丸!!」とよく起こしていただきました。時々カバン持ちで銀座の高級クラブに連れて行っていただきました。気が付くといつも私は寝ていました。今から考えるともったいない事です。妻の実家が病院から徒歩圏という事もあり、妻より多く実家に泊めていただいたのを覚えています。毎週金曜日には安田先生が外来を手伝いに来られました。「金丸君、今日はどこに昼飯食べに行こうか?」といつも聞かれ広尾のおいしいレストランを探しておくのも私の

仕事でした。当時安西先生が出張でおられない時は富澤先生、滝沢先生が代診で来られ、これもまた驚きでした。ちょうどその時、日本熱傷学会総会の会頭(?)を安西先生が引き受けられ、お手伝いをさせていただきました。また日本航空羽田沖事故(逆噴射)と重なり、ヘリコプターで患者が多数搬送され、手術機会が多く、植皮術等を身近で勉強させていただきました。私は日赤医療センター出向後カナダに留学する事になり、神奈川県皮膚科医会とは段々疎遠になっていきました。

帰国後、国立横須賀病院(現横須賀市立うわまち病院)医長時代、叔父に替わって幹事を引き受ける事になり、その後常任幹事として神奈川県皮膚科医会と深くかかわりを持つ様になりました。また丁度その時太田先生に皮膚の日をやるようにいきなり指名され、その後10年間(当時は横浜そごうの会議室を借用させていただいていた)毎年開催する事になり、日臨皮南関東山静支部長までさせていただきました。加藤会長の時には会計、原・菅原会長の時には企画委員長、栗原会長の時には副会長をおおせつかり、それぞれに多忙でした。早いもので開業して25年が過ぎました。現在は監査役として、また国保の審査員の一人として、微力ながら神奈川県皮膚科医会の一員として携わっています。

私にとっては、はじめは本当に懇話会でした。楽しかった思い出ばかりです。今は少し大きくなり過ぎた感もありますが、コロナ禍でWeb開催になってしまい、ますますその存在価値が問われる時代に突入した気がします。皆と力を合わせてこの難局を乗り越えようではありませんか。